

# ベストピア Bestopia

「パリ通信 31号」

ベストピアは小原靖夫の個人誌です。

平成二十六年七月  
第二十一号

< 2014年 7月 >

古賀 順子

## パリ祭

7月に入っても、雨と低温の安定しない天気が続いていたパリですが、7月14日パリ祭から、ようやく夏らしくなってきました。

1789年7月14日、特権階級の支配に対して蜂起したパリ市民がバスティーユ牢獄を占拠。フランス大革命の始まりとされる日です。以来、フランス人にとって、7月14日は単なる祝日ではなく、精神の拠り所と言っても過言ではありません。

今日のパリ祭は、コンコルド広場に設置された大統領主賓席に向かって、シャンゼリゼ大通りを行進する軍事パレードとシャイヨ宮からエッフェル塔に向けて打ち上げる盛大な花火に象徴されます。2011年緑の党代表として大統領選に出馬したエヴァ・ジョリが、当選の暁には7月14日の軍事パレードを廃止すると宣言し、フランス人の大きな反感をかったことは記憶に新しい出来事です。今年も、第一次世界大戦勃発から百年を記念するパレードでした。戦闘機ラファールやミラージュ 54機が轟音をたててパリ上空を飛行し、ピューマ、タイガー、ガゼルと名付けられた戦闘ヘリ 36機が後に続きます。陸上では、戦車、騎馬隊、パラシュート隊、外人部隊など、3700名を超える軍人がパレードに参加。アフリカのマリ介入に参加した兵士へのオマージュも見られました。飛行機が発明され、1914年の第一次世界大戦で歴史上初めて空爆が行われるようになって百年、最新技術を搭載した今日の戦闘機を見るにつけ、残念ながら、これからも戦争は終わらないだろうと思います。戦争の形態も進化し、どんなに平和を訴えても、人は戦争に学ぶことができないと感じます。2014年は、1944年6月5日から6日未明にかけて行なわれた連合軍ノルマンディー上陸から70周年でもあります。イギリス、アメリカ、カナダを中心とした15万を越える連合軍が上陸作戦に参加し、

海が真っ赤に染まるほどの血を流し、多くの一般市民を巻き込み、カーンやリジューの街は壊滅状態になり、悲惨としか言えない戦争が続きます。

「Si vis pacem, para bellum」(Si tu veux la paix, prepare la guerre.)「平和を望むなら、戦争を準備せよ」とは、外敵から国境を守るためのローマ帝国時代の言葉です。武装平和の考えは現代も続き、大量殺戮を可能にする武器が開発されています。中東紛争は未だ終息せず、私たちは戦争と戦争の合間の平和に生きているようにさえ思えてきます。

パリ祭に何を感じるかは個人によって異なりますが、フランスが戦争大国であることに間違いはないと思います。ヨーロッパにいと、平和の影にいつも紛争が見え隠れしていると感じます。日本にいる時には考えもしないことでした。

パリ祭の賑わいからは遠く、ローヌ河添いには、点々と広がるひまわり畑の黄色がとても綺麗でした。パリを離れて地方へ行くと、当たり前のことですが、別の世界を感じます。黄色が幸せの色だと言われることも納得します。春先の菜の花、真夏のひまわり、麦畑、とうもろこし畑、さらにはローヌ渓谷の葡萄畑、フランスの農地は色とりどりに美しく仕切られた絨毯のようです。収穫期に入った杏の果樹園では、朝から鈴なりの杏を摘む人、農業協同組合へ出荷する人が忙しく働いていました。蝉の音が響く南フランスの乾いた夏の太陽、その下に大きく広がる緑豊かな農地、自然と一体になって働く人々の姿には、素朴に生きることへの懐かしさのようなものを感じました。

そして、どんな小さな村にも、中心には大きなポプラやプラタナスの木々が陰を作る広場があり、その広場には噴水があり、噴水近くには第一次大戦、第二次大戦で亡くなった村出身の人々の名前を刻んだ碑があります。フランスでも日本でも、祖国を守るために死んでいった人々が大量にいることを思うと、真夏の太陽を受けて、普通に生活できることがとても幸せに感じます。